平成30年度

入学試験問題

第2回

国語

1　問題用紙は監督者の指示があるまで開いてはいけません。

2　開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。

3　答えはすべて解答用紙に記入して下さい。

4　記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点や符号は一字として数えるものとします。

5　問題は1ページから15ページまであります。

受験番号		氏名	

森村学園中等部

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

よく「ものを、ありのままに見なさい」といういい方をする。それは偏見や思いこみを捨ててものを見なさいという意味で使われる。しかし、「見る」ことを視覚に限定して考えた場合、いくらありのままに見ようとしても、生物固有の知覚の枠組みから外れるものは見ることができない。

われわれは光によって世界を見ている。光というのは電磁波のうち波長が三八〇から七八〇ナノメートルの範囲内のものを指す。目に、この範囲内の波長が入ってくると視細胞が興奮する。視細胞のうち、色に反応するのは錐体とよばれるものだ。人間の錐体は三種あり、波長の長さに応じて異なる反応をする。その反応が脳に伝わると、波長によって、いわゆる虹の七色のような紫から赤にかけての色として感じられるのである。

①リンゴを見て赤いと感じるのは、リンゴに反射した光の波長に反応する錐体が興奮し、その興奮が「赤」という感覚を生み出すからだ。つまり、外部に赤い光が存在するのではない。「赤」という感覚を生み出しているのは脳なのである。一方、紫よりも波長の短い紫外線、赤よりも波長の長い赤外線は人間の錐体ではとらえられないため目に見えない。

（中略）

視覚の構造は動物によって異なる。チンパンジーやゴリラ、ニホンザルなどアジアやアフリカの霊長類には、人間と同じく三種の錐体があるので、人間と同じような色の世界を見ている。しかし、イヌやネコなど哺乳類の大半は、錐体が二種しかないため、赤が見えず、人間でいえば色覚異常のような世界を見ている。色鮮やかな花畑も、イヌの目にはモノトーンに映っているのである。一方、鳥や魚やハ虫類、昆虫のように四種、あるいは五種の錐体をもつものもいる。これらの生きものは人間よりも広い範囲の波長が見える。つまり、紫外線を「見る」ことができる。

紫外線が見えると、世界はどう映るのか。たとえば、モンシロチョウの羽はわれわれの目にはみな白く見えるが、じつは紫外線の反射率がオスとメスとで異なる。このためモンシロチョウはオスやメスを一目で見分けることができる。また、人間の目には同じ色にしか見えない花でも、紫外線の反射率が異なれば、モンシロチョウには別々の花に見える。一方、モンシロチョウには赤が見えない。モンシロチョウにとって赤は人間にとっての赤外線と同じく暗黒であり、光としても色としても感じられない。

このような視覚の構造の違いが生まれたのは、それぞれの種の生存戦略と関係している。

（中略）

「ありのままに見る」といっても、視覚のちがいによって見えている世界は、これほど異なっている。②人間の見ている世界が唯一の正しい世界というわけではない。鳥や昆虫には人間には感知できない豊かな色彩の世界を感じているものがいるのを忘れてはならない。

見ている世界は知覚の枠組みだけで決まるわけではない。感覚が*鋭敏だからといって、かならずしも多くのものが知覚されているとはかぎらない。例えば、イヌの嗅覚は人間の数千倍とも数千万倍ともいわれる。これは匂いを嗅ぎわける細胞が、人の場合は約五〇〇万個なのに対して、イヌは約二億五千万個もあるためである。しかし、イヌはその鋭い嗅覚でつねにあらゆる匂いを感知しているわけではない。関心のある匂いには集中するが、そうでない匂いは無視しているからである。

③これは人間も同じである。同じ視覚の構造を持つ人間であっても、文化や時代によって見える風景がちがうのは、どこに関心をおいてイメージをつくるかが異なるためである。（中略）町を歩いている若い女の子たちは中年男性などは見ていないし、若い男性は女の子ばかり見ていて、そのほかのものは目に入っていないかもしれない。別々の年齢の人達が同じ町を同じ時間歩いて、なにを見てきたかと聞けば、それぞれまったくちがう答えが返ってくるはずである。

④マーシャル・マクルーハンは、こんな話を紹介している。

二〇世紀の前半、あるアフリカの村で、白人の衛生監視員たちが、村人たちに衛生の大切さを教える映画を見せた。上映後、監視員は、村人に「あなたたちは映画で何を見ましたか」とたずねた。監視員は「手を洗っているのを見ました」とか「服をきれいにしているのを見ました」といった反応を期待していたはずだ。ところが、村人から返ってきたのは「ニワトリを見ました」という答えだった。一人だけではなくみな同じことをいった。

監視員たちはとまどった。映画は衛生の大切さを説いたものであって、ニワトリとは関係ない。そもそもニワトリが映画に出ているはずなどなかった。いぶかしんだ監視員が注意深く映画を見なおすと、途中で、一瞬、画面の下をニワトリが横切る場面が見つかった。撮影現場のそばにいたニワトリが偶然カメラに映りこんでいたのだった。監視員たちは、このときまで、だれもそのことに気づいていなかった。

Ⅰ、村人たちにとって、この映画でもっとも印象に残ったのが、このニワトリだった。一方、監視員たちが伝えたかった映画の筋(ア)については、村人はまったく理解していなかった。

この話は、無文字社会の人びとが映画の内容を理解できないことを伝えているわけではない。人は、自分たちの文化的な文脈の中にあるものしか見えないのである。われわれが映画を見てストーリーを理解できるのは、そこに使われている約束事を学習して理解しているからだ。

Ⅱ、ドラマの中で男性の笑っている顔が映り、次に女性が照れている顔が映ったら、われわれは説明されなくても、二人が同じ場所で見つめ合っているとわかる。それは普段からテレビや映画を通して、そういう映像の(イ)文法に慣れ親しんでいるからである。しかし、そうした約束事を知らなければ、男と女の関係を結び付けては考えられない。監視員たちが上映した映画の中に、村人がニワトリしか見えなかったのは、⑤唯一、ニワトリだけが村人の生活の文法で解釈できるものだったからである。

Ⅲ、「見る」には約束事が必要なのだ。これは人間も動物も同じである。動物行動学者のティンバーゲンは、セグロカモメのヒ

ナは餌がほしいとき、親鳥のくちばしの先にある赤い点をつつくことを発見した。ヒナは親鳥をその全体の姿で認識しているのではなく、くちばし状の形とその先端にある赤い点として把握しているのである。それがヒナにとって、親を認識するために先天的にプログラムされた約束事である。この時期のヒナには、たとえ赤い印をつけた棒であっても親鳥に見えるのである。

（中略）

セグロカモメのヒナだけでなく、人間もほかの動物も、ありのままの世界や自然を、全体として認識しているわけではない。というよりも、ありのままの世界は、見たくても見ることができないのである。ありのままの世界とは、どこにも切れ目も境界もない連続体である。それは名づけようもなければ、認識しようもないものである。

（中略）

では、ありのままの世界とはどのようにイメージできるのか。⑥それは生まれたばかりの赤ん坊や、先天的に目の見えなかった人が手術で目の機能を回復して、初めて目でものを見たときに感じる世界に似ているかもしれない。脳神経科医のオリヴァー・サックスは、そんな患者が初めて自分の目で世界を見たときのことを書いている。そのとき患者は「なにを見ているのかよくわからなかった。光があり、動きがあり、色があったが、すべてがごっちゃになっていて、意味をなさず、ぼうっとしていた」と語ったという。

ふつうの人は、部屋を見れば、手前にテーブルがあり、その上に花びんがあり、その向こうに壁があり、絵がかかっている、といった関係性をすぐに把握することができる。しかし、その患者はすべては見えているのに、物や人の境界線、遠近感、関係などがわからず、色も形も動きもすべてがごっちゃにしか感じられなかったのだった。脳に信号は送られていたが、脳はそれらを意味づけることはできなかった。

「見る」とは送られてきた信号を脳が意味づけることである。先の患者が体験したような、すべてがつながってごっちゃになっている世界に、切れ目を入れ、約束事やパターンをあてはめ、自分にとって理解可能なものに変換することによって、初めて「見る」ことができる。生まれつき目の見える人は、このような作業を、生まれてからずっと行いつづけている。⑦「見る」とは学習である。文化や環境といった約束事にしたがって目に入ってくる信号を関連付け「世界」をつくるのが「見る」ことである。⑧ありのままの世界を、見ることはできないのである。

（田中真知『美しいをさがす旅にでよう』より）

※　問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

（注）＊鋭敏……感覚が鋭いさま。

問一 ――①「リンゴを見て赤いと感じる」とありますが、私たちがリンゴを赤いと感じる仕組みの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア リンゴの表面に赤い光があたり、その赤い光に錐体が興奮し、その興奮が赤という感覚を生み出す。
イ リンゴは赤いという思い込みによって、赤色を作りだす錐体が興奮し、赤という感覚を生み出す。
ウ リンゴの表面に反射した光の波長に、錐体が興奮し、その興奮が赤という感覚を生み出す。
エ リンゴの内部から発せられている光に錐体が興奮し、その興奮が赤という感覚を生み出す。

問二 ――②「人間の見ている世界が唯一の正しい世界というわけではない」とありますが、この文には作者のどのような気持ちが込められていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の知覚が鳥や昆虫の知覚に劣っていることを残念に思う気持ち
イ 人間を中心として物事を考えがちなことに対して注意を促す気持ち
ウ 人間も動物も同じ世界を生きていることに感動する気持ち
エ 人間よりも鋭い知覚を持っている鳥や昆虫にあこがれる気持ち

問三 ――③「これは人間も同じである」とありますが、何と何がどういう点で「同じ」なのですか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問四 ――④「マーシャル・マクルーハンは、こんな話を紹介している」とありますが、筆者がこの話を紹介した意図を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 映像を理解するときに、ストーリーを重視する白人の文化と、第一印象を重視するアフリカの文化の違いを対比させるため。
イ 映像を理解するときに、先進国の人たちと文明の遅れている人たちとでは、その理解の仕方が異なるということを強調するため。
ウ 同じ映像を見ても、人は、文化の違いによって関心のあるものが異なり、そのほかのものは目に入っていないということを裏付けるため。
エ 同じ映像を見ても、人は、人種の違いによって注目する部分が異なり、受け取るメッセージが変わってしまうことを印象づけるため。

問五 [I] から [III] に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さらに　イ だから　ウ しかし　エ たとえば　オ つまり

問六 ――⑤「『見る』には約束事が必要なのだ」とありますが、

(1) ここでいう「約束事」とはどういうことですか。これとほぼ同じ意味で用いられている言葉を文中の――㋐「筋」、㋑「文法」、㋒「全体」、㋓「境界」、㋔「意味」の中から選び、記号で答えなさい。

(2) ニワトリの話の中で村人が理解していなかった「約束事」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 手を洗い清潔な服を着ることが、生活の向上につながるということ

イ 自分たちの生活が、白人から見れば衛生的ではないと思われていること

ウ ニワトリは、身近な生き物であると同時に大切な食料でもあること

エ 衛生的な習慣を身に付けることで、西洋文明に近づけるということ

問七 ――⑥「それは生まれたばかりの赤ん坊や、先天的に目の見えなかった人が手術で目の機能を回復して、初めて目でものを見たときに感じる世界に似ているかもしれない」とありますが、どのようなところが「ありのままの世界」と似ているのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 光や動きや色などの刺激を強く感じすぎるために、すべてがつながって見えるところ

イ 目に映るものにうまく焦点を合わせることができないために、すべてがぼんやりと見えるところ

ウ 見えたものを区切って意味付けすることができないために、すべてが混じり合って見えるところ

エ 物や人の境界線や関係など、目に入ってくる情報量が多すぎるために、すべてが入り乱れて見えるところ

問八 ――⑦「『見る』とは学習である」とありますが、「見る」ことが「学習」と言えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　見ることで多くの情報を得ることができ、それをもとに新しい世界を創造していくことができるから。
イ　見ることは生まれたときから人間に備わっている能力であり、きっかけを与えれば誰でもできることだから。
ウ　見るとは、目に映るものを意味づけることであり、それは何度も積み重ねるなかで身に付くことだから。
エ　見ることは自然とできるのではなく、周囲の人から約束事を教えてもらってはじめてできることだから。

問九 ――⑧「ありのままの世界を、見ることはできないのである」とありますが、筆者がそのように述べる理由として**適当でないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「ありのままの世界」を見ようとしても、動物ごとに知覚の枠組みが異なるので、見えるものが限られてしまうから。
イ　「ありのままの世界」は切れ目のないつながった世界であるので、人間はそれに切れ目を入れないままでは認識できないから。
ウ　「ありのままの世界」を認識しているつもりでも、実際は人間は自分にとって理解できるものしか認識していないから。
エ　「ありのままの世界」はさまざまな約束事で出来上がっているが、人間がすべての約束事を知ることは不可能だから。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二〇一一年三月、大学卒業を間近にひかえた「ゆき」は、宮城県の農村にある実家で、地震（東日本大地震）に遭う。幸いにして「ゆき」の家は大きな被害を免れたが、翌日から、被災した近隣の人たちのために「ゆき」は炊き出しを始める。そんな「ゆき」に、祖父は自宅用にと売らずにとっておいた米を好きなだけ使えと言ってくれた。地震から三日目、「ゆき」は、父「正志」の同級生で地元農家のリーダー的な存在である「一平」と、幼なじみで役場に勤める「秀輝」とともに、遠く離れた沿岸部の避難所へと車で向かう。車にはたくさんのおにぎりが積み込まれていた。

小さな公民館に、一八人の人が寝泊まりしていた。これでは一人半畳も使えないだろう。小さな石油ストーブと古い毛布があるだけの場所だった。

ゆきたちが持ってきたおにぎりを見て、お年寄りは涙を流した。ここ三日間、菓子パンとお菓子を少し齧っただけだという。手を合わせ、拝むように感謝され、一口一口大切にご飯を咀嚼する人たちを見ていると、胸が締め付けられる。わたしが泣いている場合じゃないんだ、そう思って奥歯をぐっと噛み、ゆきは堪えた。

「美味しいね、こんなに美味しいおにぎり食べたことないね！」

小さな女の子が言った。そうだねぇ、うん、本当だねぇ、と周囲の大人たちが言った。

皆の頬が柔らかくほどけていく。

こんなにも辛い状況の中、おにぎりを食べながら皆が微笑んでいる。

①……食べ物って、お米って、こういう力があるんだ。

心の中がざわざわした。

うまく言えないけど、心の底から感動した。口に入れるものの大切さを痛感した。そして、この人たちの笑顔を祖父母に見せてあげたいと思った。

被災した人たちに、いったいどんな言葉を掛ければいいのか、ゆきはずっと考えていた。どんな言葉よりも、温かいおにぎりを一つ食べてもらうことのほうが伝わることもある。ずっとずっと励ましになる。お腹に力がこもる。お米にはそういう力があることを、ゆきは考えていた。

「このおにぎりはどうしたんですか？」

振り向くと、ハンディカメラを持った男性がいた。東京のテレビ局の腕章をつけていた。

「こんなにたくさん、どこから持ってきてくれたんですか？」
「うちです、うちで炊いておにぎりにして持ってきました」
「あなたの家、被害はなかったんですか？」
「うちは宮城県でも山側なんです。あっちはこんなに大きな被害はありませんでした。電気もガスも水も止まってますけど、家は壊れていませんから」
「山側……なんという地区でしょう？」
「寺木沢地区です」
「寺木沢……ですか」
テレビ局の男性は、うん、と一つ頷いた。
もう一人、仲間らしき男性が息せき切ってやってきた。耳打ちし、首を振る。
②「政府は何をやっているんだ！」
男性は悔しそうに拳を打ちつけた。無力さに唇を噛んでいるように、ゆきには見えた。さっきまでの自分と重なった。
「あの……東京からですか？」
「はい」
「いつからこっちに？」
「おとといです」
「じゃあ、あなたたちもまともに食べていないんでしょ？」
男たちは何も言わなかった。
ゆきは、おにぎりを二つ差し出した。
「食べてください」
「僕らは大丈夫です」
「いいから。人間は食べないとダメなんです。これ食べたら、また頑張れますから」
二人は頭を下げ、おにぎりを受け取った。
「自分の仕事は、いったい何のためにあるんだろうと思います」
一口ほおばり、男性は目を閉じた。
短い会話の中でも、彼らが単に被災地の映像を撮りに来ているのではないことが分かった。一人でも多く助けたい、力になりたい、その

ためにここへやってきた。自分たちテレビマンが遠くまで情報を発信することで、少しでも事態が好転することを信じていたのだ。けれど現実は、a□がゆいほどに無力だった。

「悔しいです。何にもできない」

「できます。これからです」

ゆきはそれだけ言って、立ち上がった。そう、自分も同じだ。これからできることを探していかなければいけない。

玄関口で秀輝が呼んでいた。次の避難所に行かなくちゃ。今ここでできることはやったのだ……手を振ってくれる女の子に笑顔を返し、ゆきは次の目的地へ急いだ。

小さな避難所を三つ回ったところで、おにぎりは無くなった。ゆきのお腹がぐぅと鳴った。

外は暮れかかっている。三人は家路を急いだ。

おにぎりが無くなった後部座席に、ゆきは深く腰を沈めた。③目に映る光景をほんの少しだけ冷静に見つめられるようになっていた。

広大な平野が再び見えてきた。④ゆきの地域とは違う、一枚一枚がとても大きな田んぼだったことが想像できる。泥に覆われ、てらてらと黒光りする様を見ていると、胸の奥がズキンと痛んだ。

「宮城の田畑、どんぐらいが被災したんだべな」

「東北全域ですよ。たぶん相当な面積だと思います」

「食糧危機になるかもな」

「東北は首都圏の台所を支えてますし、しばらくは日本中が大変なことになるでしょうね」

「チャンスかもしれねぇ」

一平がぼそりと言った。

ゆきは何かの聞き間違いかと思った。体を起こし、運転席に顔を近づけ、ちゃんと聞き直そうとする。

「チャンス、ですか？」

「あぁ。俺たち中山間地の農家にも、必然的に目がいくべや」

「だけど――」

「区画整備して、一つの田んぼをなるべく大きくして合理化を図ったのがあの辺りの田んぼだ。政府は小規模の個人農家は切り捨てる策を出したしな」

そのことは祖父と正志（ゆきの父）が話していたから知っている。小さな農家には補助金も出なくなったのだから、もういい加減儲から

ない田んぼは止めるようにと正志が言った。祖父はそのとき、珍しく正志に反論したのだ。政府が言うような四ヘクタール以上の田んぼを持つ農家なんて、この地域ではたった五軒しかない。六二〇戸ある農家のうち、たった五軒だ。つまりそれは政府の策がおかしいのだと声を荒らげていた。ゆきはその会話が妙に心に残っていた。

「だから俺も無理してでも平場に田んぼを買ってきた。でもこれだけ田んぼが潰れれば、小さい場所でも作らなきゃ米が足りなくなるんじゃないか？今までさんざん無視されてきた地域だけどよ。チャンスが来たかもしれない」

⑤「……よくそんなことが言えますね？」

絞り出すように、ゆきは言った。

「こんなときに……みんなが泣いているのに、チャンスだなんて」

「こんなときだからだよ。俺たちは命の源を作っているんだ。人間の命を預かっているんだ。責任がある。自負がある。もっともっと報われるべき職業なんだ」

「うちのじいちゃん、言ってました。損得だけで仕事を選んだら、人間が生きていく場所なんてなくなってしまうべ、って」

「きれいごとだな」

「わたし、聞いたんです。どうしてお金にならないのに田んぼやるのって。そしたら、おまえに食べさせたいからだって。そういうの、きれいごとですか？」

⑥「あんたは部外者だからそういうことが言えんだ。分かったようなこと言うんでねぇよ」

「わたしだって農家の孫娘です！」

「だからなんだっていうんだ？　あんたは部外者だよ」

「ちがいます！」

「じゃあ、あんたん家の田んぼはどうだ？　誰も継がねぇんだべ!?」

ゆきは、はっとした。

祖父が田んぼに立てるのもきっとあと少しだ。その後、じいちゃんの田んぼはどうなってしまうのだろう？正志は継がない、絶対に。すぐに耕作放棄地*だ。そんな当たり前のことにどうして気がつかなかったのだろう。悔しいが一平の言うとおりだった。

「ほれみろ、正志もあんたも、部外者なんだよ」

「わたしがやります」

考えるより先に言葉が出てきた。

秀輝がb［　　］を飲んだ。

ふん、と鼻で笑う一平に向かって、ゆきはもう一度言った。

「じいちゃんの田んぼは、わたしが継ぎます」

一平はバックミラー越しに一度だけゆきを見た。そしてそれ以上、何も言わなかった。⑦

秀輝だけが一人、おろおろとうろたえている。

「おまえ、何言ってるんだよ？　教師になんだべ？」

「田んぼもやる」

視線を合わせず、ゆきは言った。

外はすっかり暗くなっていた。ガソリンを節約するために暖房を切っているせいか、空腹のせいか、冷たくなった手を、ゆきは胸の上に重ね合わせた。

そこにはたしかに熱があった。そうして家に着くまでの間、もう一言もしゃべらなかった。

沈黙を嫌がった一平が、カーラジオを付けた。聞こえてくる情報は、どれもしんどいものばかりだ。時折、秀輝が心配そうに振り返った。勢いでとんでもないことを言ってしまって後悔していると思っているのだろう。

でも、ゆきの心は違った。

……わたしがじいちゃんの田んぼをやる。

何も考えずに口から出てしまった言葉に、自分自身が興奮していた。ここ一年、ずっと胸に引っ掛かっていたものの正体が、今、分かったような気がした。

（あべ美佳『雪まんま』より）

※　問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

（注）＊咀嚼……食べ物を口の中でよくかんで味わうこと。

＊耕作放棄地…耕されずに放っておかれている田んぼや畑のこと。

問一 ――①「食べ物って、お米って、こういう力があるんだ」とありますが、ここで言う「こういう力」とは、どのような力ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 菓子パンやお菓子では満足できなかったお年寄りたちにも、「美味しい」と言わせてしまう日本の伝統食が持つ力
イ 震災で家を失った人々にとって、あたたかな家庭を思い出させる食べ物として、傷ついた心をいやしてしまう力
ウ どんなに過酷な状況の中でも、それを食べた人々を笑顔にさせ、言葉によるなぐさめ以上に元気を与えてくれる力
エ お年寄りから小さな子どもまでが一緒にそれを食べることで、互いに励ましあう勇気と連帯感をもたらしてくれる力

問二 ――②「男性は悔しそうに拳を打ちつけた」とありますが、この様子からは「男性」のどのような気持ちが読み取れますか。その説明として**適当でないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 被災地に対する国の救助が滞っていることへのいらだち
イ 被災した人々を前に自分が何の力にもなれないことへのやるせなさ
ウ テレビマンとしての自分の仕事に限界を感じて、募らせるむなしさ
エ 大地震という、多くの犠牲者を出した自然の脅威に対するいきどおり

問三 〜〜〜 a「□がゆい」、b「□を飲んだ」は、いずれも慣用表現ですが、それぞれの空欄に入る漢字一字を答えなさい。

問四 ――③「目に映る光景をほんの少しだけ冷静に見つめられるようになっていた」とありますが、この一文には、どのような効果がありますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 避難所に暮らす被災者に持っていったおにぎりをすべて配り終えて、その達成感を「ゆき」が改めて噛みしめていることを示す効果
イ 強い衝撃を抱えたまま避難所を回るのに必死で、被災状況を現実として受け入れる余裕がそれまでの「ゆき」になかったことを示す効果
ウ 少しでも被災者の役に立ちたいという自分の思いが、どれくらい皆に伝わっただろうかと「ゆき」が自問していることを示す効果
エ 被災者の悲惨な様子に胸を痛めてきた「ゆき」が、外の景色を目にすることで、つかの間の解放感を味わっていることを示す効果

問五 ――④「ゆきの地域」とありますが、「ゆき」が暮らす地域の説明として適当なものを、次から**二つ**選び、記号で答えなさい。

ア　小規模農家が集まる中山間地にあり、震災の被害は比較的少なかった。
イ　国の政策にしたがって区画整備された地域で、そのため震災の被害は少なかった。
ウ　山間地にあるため被害は大きくはなかったが、大規模農家ほどダメージは大きかった。
エ　国からの補助金も出なくなった農家が大半で、なかには後継者のいない農家もある。
オ　四ヘクタール以上の田んぼを持とうと、農家の多くが平場に農地を買い進めている。

問六 ――⑤『……よくそんなことが言えますね？』とありますが、この言葉からは「ゆき」のどのような気持ちが読み取れますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　震災を口実に金もうけのチャンスをたくらんでいる「一平」のずるがしこさに対して、驚くと同時にあきれている。
イ　被災している気の毒な人々に同情も寄せずに、政府に対する不満を口にする「一平」の無神経さに対して怒っている。
ウ　被災地の悲惨な現状を目にしながら、それを自分たちの金もうけの好機ととらえている「一平」に対して反感を抱いている。
エ　震災がまねいた食糧危機が農家の価値を見直す良い機会になると計算している「一平」の大胆さにとまどっている。

問七 ――⑥『あんたは部外者だからそういうことが言えんだ』とありますが、「一平」が言う「部外者だからそういうことが言える」とは、どういう意味ですか。五十字以上六十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八 ――⑦「それ以上、何も言わなかった」とありますが、「一平」がこのような態度をとったのは、なぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　「ゆき」との言い争いで、自分が強く言いすぎて彼女を傷つけたことを後悔しているから。
イ　「田んぼを継ぐ」などとよく考えもせずに口にした「ゆき」の浅はかさにあきれているから。
ウ　「ゆき」はいずれ後悔するにちがいないと思い、今はそっとしておこうと気をつかっているから。
エ　腹立たしさが収まらず、「ゆき」のほうから謝ってくるまでは口をきくまいと思っているから。

問九　次の会話は、「『ゆき』が田んぼを継ぐことを決意したのは、なぜか？」をテーマに、グループ学習を行っている場面です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

まさお「ゆきがじいちゃんの田んぼを継ごうと決意するうえで、避難所を訪ねた体験は大きかったと思うんだ。」

はるき「そうだね。あそこで被災した人々がおにぎりを食べて微笑んでいる様子を見て、ゆきは米作りという仕事の尊さに改めて感動したんだよ。あの時ゆきが［　Ⅰ　］と思ったのは、その感動をじいちゃんやばあちゃんにも伝えたかったんだね。」

なつみ「それから、帰りの車内での一平との会話も、ゆきの気持ちを動かす重要なきっかけになったのはまちがいないわね。」

み　く「でも、私は一平のこと好きになれないわ。『チャンスが来た』と言ったり、ゆきを部外者と決めつけたりして、嫌な感じ！」

なつみ「たしかに、二人は険悪な雰囲気だったよね。でも、私はむしろゆきの方が、甘いと思うの。一平は、米作り農家の厳しい現実を知っているからこそ、そう言ったんじゃないかしら。」

まさお「たしかに、一平は単にお金もうけのことしか考えていないわけじゃないんだね。一平の言った［　A　］とか［　B　］という言葉には、米作りにかける強い使命のようなものが感じられるし、政府の政策に対する不満にも切実なものがあると思うんだ。」

はるき「だから、そんな一平に自分の家の田んぼを継ぐ者がいないことを指摘されて、ゆきははっとした。そして、『悔しいが一平の言うとおりだった』とあるように、それを認めざるをえなかったんだね。」

み　く「でも、ゆきが『わたしが田んぼを継ぎます』と言ったのは、売り言葉に買い言葉で、たんに一平に反発したかったからなんじゃないの？」

なつみ「たしかに、その場の勢いで口にしちゃったようにも読めるけど、ゆきは、以前から田んぼを継ぐことを心のどこかで考えていたんじゃないかしら。［　Ⅱ　］という一文は、それを裏付けていると思うわ。」

まさお「そういう意味では、一平とのやり取りが、結果的に、ゆきの背中を押してくれたとも言えそうだね。」

(1)　［　Ⅰ　］に当てはまる言葉を二十字以内で本文中に求め、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

(2)　［　A　］・［　B　］に当てはまる二字熟語をそれぞれ本文中に求め、ぬき出しなさい。

(3)　［　Ⅱ　］に当てはまる一文（三十八字）を本文中に求め、最初の五字をぬき出しなさい。

三　次の①～⑧の――部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の――部の読み方をひらがなで書きなさい。

① 彼の店は規模をシュクショウして経営を続けた。
② その店は余計な装飾のないカンソな造りだった。
③ つくし野駅からトホ五分くらいで学校だ。
④ 病名をセンコクされても祖父は動じなかった。
⑤ 家族で京都に行き、コウヨウを楽しむ。
⑥ 手本をウツしとるように書きなさい。
⑦ 未然に事故をフセぐために通行止めにした。
⑧ 最終的な判断は私にユダねられた。
⑨ 森に囲まれた社を前に祈りをささげる。
⑩ 猫の額のようにせまい庭で花を育てている。
⑪ 得手不得手はだれにでもあるものだ。
⑫ その作品はモネの作品を模して、描かれた。